

自己評価報告書

平成23年3月31日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2011

課題番号：20590520

研究課題名(和文) 急性期医療における有害事象の自動判定システムの開発に関する研究

研究課題名(英文) Development of screening system for adverse events in acute care Hospitals

研究代表者

梅里 良正 (UMESATO YOSHIMASA)

日本大学・医学部・准教授

研究者番号：60213485

研究分野：医療管理学

科研費の分科・細目：境界医学・医療社会学

キーワード：Adverse events, Quality of care, Clinical indicator, DPC data

1. 研究計画の概要

有害事象(Adverse events)は、診療において避けたい場合もあり得るが、医原性である場合もあり、その発生率を低下させることは、医療の質の向上のために極めて重要である。本研究は、病院において診療経過を再検討することが期待される有害事象(Adverse events)の候補症例を、そのための別途のデータ収集等の労力をかけずに、既存の診療情報から判定・抽出するロジックの開発を目的とする。

2. 研究の進捗状況

平成20年度(初年度)は、再入院事例について、有害事象に起因するものと、そうではない計画的な再入院の判定ロジックについて検討を行い、それぞれ5事由、10事由に分類して、特定ロジックを作成した。平成21年度は、入院中の有害事象について、とくに周術期の有害事象判定ロジックの開発に取り組み、周術期有害事象判定ロジック第2版を確定した。平成22年度は、入院中の有害事象の全体的な枠組みの検討を行なうとともに、並行して褥瘡の発生と転倒・転落の発生の判定・把握ロジックの開発に取り組んだ。褥瘡については、当初、我が国で標準化が進んでいるDPC請求のためのデータ(様式1、E・Fファイル)からの判定を試みたが、DPCでは登録病名の数に制限があり、褥瘡(L89)がはみ出して入力されていないことがあるため、電子カルテに登録されている情報も利用して判定するロジックの検討を行なった。転倒・転落については、まず、入院の契機となった病名や入院時の併存病名に外傷病名がなく、入院後発症病名に外傷病名がある症例を抽出し、病的骨折(M84)等を

除外するなどの絞り込みロジックの検討を行なった。検討の過程で、最も問題となるのは電子化された診療情報は後利用を想定して入力されていないため、例えば褥瘡の発生日が医師が入力した日付になっており、入院時に褥瘡があったのか、入院後に発生したのかが明確に分離できないなどの問題が生じるケースがある。またDPC病名には請求額に関係しないあるいは登録数オーバーの病名が欠落していることがあるとともに、例えば褥瘡病名と褥瘡診療計画書の作成状況と突合すると相互に包含関係にないなどの状況にある。診療の質に関係する分析が行なえるようにデータ項目や入力ルールを定めていくことが必要である。

3. 現在までの達成度

②概ね順調に進展している。

(理由)

有害事象抽出ロジックの検討は、研究計画に沿って概ね順調に進展しているが、当該ロジックを病院の実データに適用した有害事象の抽出においては、病院における診療情報の精度による制約が新たな課題となっている。

4. 今後の研究の推進方策

- (1) 開発した有害事象判定ロジックの精度向上
- (2) 薬剤の副作用など新たな有害事象判定ロジックの作成
- (3) 研究成果の集約と学会発表

5. 代表的な研究成果

[学会発表](計3件)

- ① 梅里 良正、前田幸宏、大道久、内藤恵

子, 佐藤正子, 芳村照美, 内谷隆之, 藤原克美, 小阪真二, 石野外志勝, 清水史郎: 急性期医療における有害事象の自動判定システムの開発に関する研究(第一報)-再入院率に関する考察-, 第35回日本診療情報管理学会学術大会、2009年9月18日、アクトシティ(浜松)

② 前田 幸宏, 梅里 良正, 大道 久: 急性期医療における有害事象の自動判定ロジックに関する研究、第47回日本医療・病院管理学会学術総会、2009年10月17日、東京女子医大(東京)

③ 内谷 隆之, 芳村 照美, 藤原 克美, 小阪真二, 石野 外志勝, 清水 史郎, 内藤 恵子, 佐藤 正子, 大道 久, 前田 幸宏, 梅里 良正: 退院時要約の電子データを用いた有害事象の抽出、第29回医療情報学連合大会、2009年11月24日、広島国際会議場(広島)